

中村光夫全集

第八卷

筑摩書房

中村光夫全集 第八卷

昭和四十七年九月二十五日発行

著 者 中 村 光 夫

発行者 井 上 達 三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発 行 所

筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一九一

電話 東京例 七六五二(代表)

振替 東京 四 一 二 三

印刷 株式会社 精 興 社

製本 牧製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72508 (出版社) 4604

第八卷目次

現代小説の弱点	3
翻訳について	6
翻訳文学の問題 I	9
文学の俗化	12
映画は「実在」か	18
なぜ文学論争は起らぬか	23
小説の美学	28
(一、小説の芸術性 二、小説の本質 三、小説の方法 四、表現の技術)	
小説の可能性と限界	63
翻訳文学の問題 II	72
魔的なもの	76
外国文学の影響	80
明治文学の理想	85

半世紀の過去……………	94
占領下の文学……………	101
小説家と批評家……………	113
文章について……………	119
告白の問題……………	124
現代小説の欠陥……………	138
作家の青春……………	142
短篇小説の伝統……………	145
口語文と外国文学……………	153
読物から見る物へ……………	160
外国文学の新しい理解……………	162
新聞と小説……………	168
小説の思想性と娯楽性……………	176
文芸と文学……………	181
見世物と演技……………	187
現代のユーモア……………	194

近代以前の笑ひ	200
日本のリアリズム	207
小説のイロハ	231
「鍵」批評をめぐって	234
「昭和文学」について	237
賭博性は文学の敵か	241
論争の詐術について	247
小説について	251
なぜ作家論を書くか	259
文学のありかた	
I 芸術は人間に必要か	268
II 志賀直哉と谷崎潤一郎	280
III 思想と文体	292
IV 小説は芸術か	305
V 「金閣寺」について	316
VI 自己表現について	327

VII「鍵」を論ず	340
VIII表現の自由	352
IX文学の復権	363
風俗小説	376
フランス文学の影響	378
小説の歴史	385
(一、小説とは何か 二、詩と散文 三、小説の発達	
四、バルザックとスタンダール 五、フロオベルとゾラ	
六、現代小説の問題 七、写真について 八、昭和の小説	
九、小説の可能性)	
言葉と文章	456
文学の非情性	462
中間小説論	465
「日本」を中心に	474
言葉と人生	477
現代文学の可能性	488

現代の長篇小説	491
文学の回帰	513
ふたたび「日本」を	518
悪口	521
ふたたび政治小説を	528
私小説と作家の「私」	545
日本の近代化と文学	548
批評の使命	576
「人間」は不在か	599
器用と凝り性について	602
「笑ひの喪失」について	609
男性文学と女性文学	615
想像力について	620
解題	655

文学論
(三)

現代小説の弱点

最近の雑誌に現はれた興味深い文芸評論として、僕はまづ桑原武夫氏の「日本現代小説の弱点」をあげます。これは「人間」の二月号にでたものでありますが、桑原氏はここで我國の所謂近代小説に何が最も欠けてゐるかを反省し、これに將來の作家の対処すべき具体的な方策を示唆してゐるのであります。

その論旨をかいつまんで云ふと、氏はまづここで今日の我國の小説が、「人生いかに生くべきか」といふ問題に触れてゐないことを指摘し、作家の広い意味での倫理性の欠如を現代日本の小説家の最も根本的な欠陥と断じて、これに反して西洋の近代文学の根本の特色は文学の倫理化であつたとして、ルソーを始め、「スタンダール、ニーチェ、トルストイ、そして今日のジイドなどに至るまで、偉大な小説家の中心問題は常に倫理の発見に、人生如何に生くべきかにあつた」といひ、「日本では、明治以来西洋文学は移入されたが……以上のべたごとき近代小説の根本的性格は理解されるに至らなかつた。」とし、その結果として「日本の現代小説は近代生活らしきものを描きつゝ近代性には甚だ乏しいといはざるを得ない。わが小説界最大の欠点はこゝにある。」と云つてゐるのであります。

この議論は現代の日本の小説の根本欠陥の一面を実に鮮やかに照らしだしてゐる点で甚だ優れたものであり、誰もこの点で氏の明快な議論に異議をさしはさむものはないと考へられるのであります。ではこの批評が果して我國の現代小説の性格についての充分な批評であり、解剖であり、つまり我國の小説が今日の頹廢と混乱から再び立ち上るためには、氏の指摘したやうな欠陥を是正すればそれでありかといふと、おそらくさうではないのであります。

つまり氏の議論は我國の小説の欠陥の一面を非常に鋭くついでゐるのであります。それはあくまで一面をつ

いたに止まるのであります。我國の現代小説はもつと複雑な腐り方をしてゐるのであつて、その原因は単に明治以来、西洋に学びかたが不徹底であつたといふだけではないのであります。

一体、桑原氏の書く評論は、いつも明快精緻なことにかけては他の追従を許さないものであります。惜しいことには現代芸術に対しては高みの見物といった傍觀者の立場をとつてゐて、現代の泥沼のなかに自分も立ち混り、自分もそこで手を汚して新しいものを築かうとする気魄に欠けてゐるのは、残念なことなのであります。ここにもさうした氏の特色（または欠陥）が判つきりとてゐるのであります。

文学の近代性といふものを氏のいふやうに文学の倫理性といふ風にとると、かうした意味の文学の近代性は、我國にはなかつたとは決して云ひ切れないのであります。

「人生いかに生くべきか」といふ問題は、二葉亭や漱石、蘆花をはじめ、藤村、花袋、泡鳴など自然主義の作家にとつて、また下つて大正期の優れた作家たちにとつても、彼等の文学の中心課題であつたと云つてもよいのであります。

むろん彼等がかういふ問題を提出した手付きは、大部分觀念的な、そして未熟なものであり、この点で彼等はそれぞれに無意識な喜劇の主人公であつたと云つてもよいのであります。しかしながら彼等はみな、その課題に應じて打ち樹てた自己の信念に身を以て殉じた点では、桑原氏の云ふ文学の倫理化（おそらく性急にすぎる形で）立派に実践したのであります。

ですから現代の小説を論ずる場合に大切なのは、むしろかうした我國に未熟ながら育たうとした近代文学の芽が何故健全に延び得ずに枯れてしまつたか、これら明治の作家達にくらべて技巧的には目醒しい進歩を示した現代の小説家たちが、何故その創作態度の根本では、純真な倫理的な（すなはち近代的な）熱情を喪つて、卑屈な戯作者氣質に甘んずるやうになつてしまつたかといふ、長い間に眼に見えず行はれて来た墮落の過程を明瞭にしなければならぬのであつて、これこそ批評家が今後の文学の再建のために是非しなければならぬ仕事であるのに、桑原氏の所論が、この根本については何等触れてゐないのは甚だ残念であつて、氏の議論が一面的な独善

論に終らねばならない所以なのであります。

だから氏が結論として「これから新しい小説の道に進まうとする若い人々にいふ」忠言も、「芸術は俗にいはれるごとく直接人生社会の観察から生まれるものではなく、実はすぐれた芸術品の模倣に胚胎する。そしてこれを観察経験によつて養はねばならぬことは言ふまでもない。」といふ抽象的な一般論にとどまつてしまふのであります。

そして氏は次のやうに云ひます。

「現在有名な日本の小説家の作品に余りこだはることなく、専ら西洋の近代小説の傑作に打込んでみるがよい。そして現実を見るがよい。小説を、和歌や俳句を作ると同じような気持で書くことができぬやうになるがよい。日本の古典もしばしかたはらに置いてよい。」

しかしかういふことは、明治末年の自然主義の作家がすでにやつたことであるのに桑原氏は氣付いてゐるのでせうか。花袋も藤村も泡鳴も秋声もみなこれと同じ革新の熱情に燃えて、自分の文学の道を切り拓いたのであります。

だから今さらこれと同じことをくりかへしたところで、彼等がフロオベル、モウパッサンを模倣しそなたやうに、今度はスタンダールやドストイェフスキを模倣しそなた作品ができるだけではないでせうか。

日本が永遠に西洋文学の植民地たることに甘んじてよいなら、それも結構でせうが、僕等としては少なくともそれから一歩進めた高いものを求めるべきではないでせうか。

僕等がもし西欧の文学から本当に何者かを学ぼうとするなら、単に出来上つた作品を手軽に「模倣」するより、むしろこれを生みだした作家の精神をその生きた姿で理解し、噛み砕き、身につけることこそ必要でありませう。

(昭和二十一年五月)

翻訳について

正宗白鳥氏は、名著「文壇人物評論」の巻頭で、「明治文壇総評」をこころみ、その結びとして次のやうに云ひます。

「昔読んで面白く思つた明治の小説も、今日読むと、大抵は詰らなくなつた。それは、時勢の変遷にもより、年齢の加減にもよるが、本当に傑れた作品が乏しかつたためなのだ。その証拠には、あの頃のものでも、二葉亭や鷗外の翻訳物は、今読んだつて、そんなに見褪めがないではないか。『浮草』でも『肖像画』でも『即興詩人』でも。それ等の翻訳は、外国物と云ふよりも、むしろ明治文壇の産物のやうに、私などには感ぜられてゐる。改造社や春陽堂の『明治文学全集』の中に、多くの翻訳が堂々としてゐるのは、当然であるが、明治文壇に取つてはあまり名誉なことではない。」

これは僕が翻訳文学の問題を考へるとき、いつも心にひつかかつてくる言葉です。「明治」以来、現代にいたるまで、西欧の翻訳文学の問題はたんなる翻訳の問題ではない。英国にとつてのフランス文学の翻訳が、フランスにとつてのアメリカ文学の翻訳と、本質的にちがつたものだ、といふ「明治文壇」にとつても、また現代の文学界にとつても「あまり名誉ではない」にしろ、ともかく動かすことのできないひとつの大きな真実が、ここにはつきり捕へられてゐるのです。

明治以来、我国の文学が西欧の文学からうけて来た「影響」が、ヨーロッパ諸国相互のあひだで見られるものなどとは、全く質のちがつた文学概念そのものの革命であり、しかもそれが全く異質の新しい「文明」の移入にもなふ現象であつたといふことは、そのなかで翻訳文学のしめる位置に特殊な重要性を与へてゐるのです。

大ざつぱに云つてしまへば、明治文学全体が、西洋文学の翻案であつた時代に、翻訳がお手本のより直接な移

植として、つねに指導的な役割を果たしたのは、ある意味で自然なことでした。

吉田精一氏の説によると、鷗外は西欧の小説を翻訳するにあたつて、つねに我国の文学界の動きに注意を払ひ、たとへば犯罪を扱ふ小説が流行しさうな兆しを見せると、探偵小説の傑作を訳するといふ風に、翻訳といふ仕事によつて、我国の文学を批評し、同時によいお手本を指して、啓発するといふ態度をとつてゐたといふことです。これは、いかにも鷗外らしいやり方であるとともに、明治文学の性格、ひいてはそのなかで翻訳文学のしめた位置をよく示してゐます。

翻訳小説によつて今日では考へられない大胆で重要な文体革新の試みが行はれ、しかもそれが創作の小説で行はれた場合よりはるかに強い影響を後代の作家たちに及ぼした二葉亭の「あひゞき」「めぐりあひ」などの出現も、かうした時代の背景を考へて、はじめて理解し得ることです。

その後も「片恋」(アーシャ)「うき草」(ルーヂン)などの訳書が、花袋、独歩、藤村などの新しい文学を夢みる青年たちに、どのやうに迎へられ、生活と精神の糧になつたかは、「東京の三十年」などにくりかへして語られてゐます。

鷗外の「即興詩人」もまた浪漫期の明治文学の諸作のうち、もつとも広く且つ深く人々の心を動かした作品で、鏡花の「照葉狂言」を生んだだけでなく、永井荷風、正宗白鳥のやうな次の時代の「幻滅」を体験した敏感な青年たちも、アントニオとアヌンチアタの悲恋の物語に若い心をときめかしたのです。

荷風は「新橋夜話」の「昼すぎ」の中で、「美妓アヌンチアタが最後の姿をナポリの陋巷に見たる即興詩人の心持……」にふれてゐますし、白鳥はさきにひいた「総評」で『即興詩人』は、たゞの翻訳ではなくつて、創作であると云つていゝ。……エキゾチックな香ひが、全篇に満ち溢れてゐること、明治文学史上類を絶してゐる……私と同じ時代に、『即興詩人』に心酔した人々で、南欧渡遊を企つるならば、この一卷を手鞆の中に収むることを忘るゝ勿れ。旅の興味がどのくらゐ加はるか知れない。自己の青春の夢を随所に辿ることも出来て、感慨

無量であらう。」と書いてゐます。正宗氏がこれだけの讃辭を呈してゐる作品は、おそらく明治時代の「創作」のなかにはないのです。

明治文学のなかに、我國の文学史の上で古典に数へるべき翻訳が、詩においても小説においても見られるのは、以上のべたやうな、それが時代の文学に果してきた役割と切りはなしては考へられないことです。

現代の翻訳小説が量の上で非常な増加を示すとともに、時代の文学との交渉の上でも、明かに変質してしまつてゐるのは、誰しも知るとほりです。明治時代のやうに、作家にも影響をあたへることを希ひ、同時代の文学をそれによつて富まさうといふ意図の代りに、よく云へば広い読者を直接に目ざし、悪く云へば、訳書の売れゆきばかり気にする商業主義の支配が眼立ちます。

したがつて作家の方でも大部分は翻訳書などにそつぽを向くのを護身の術と考へるやうになり、現代の翻訳文学の異常な隆盛のかけに、かへつて時代の文学との溝が次第に深くなるやうです。

(昭和二十四年四月)

翻訳文学の問題 I

この程実験劇場で上演された「ヘッダ・ガブラー」について、正宗白鳥、小林秀雄の両氏が「漱石とイブセン」(人間十二月号)「ヘッダ・ガブラー」(新潮十二月号)といふ感想を書いてゐます。

「ヘッダ」の公演がたんに新劇として出色の出来栄であつただけでなく、イブセンといふ忘れられた作家を現代に復活させた点でひとつの文学的事件といつてよかつたことを思へば、これは当然のことですが、両氏の感想は、たんに新劇やイブセンについてだけでなく、現代の文学全体についても大きな示唆をあたへます。

それはこのすぐれた翻訳劇を見て両氏がほとんど同じに感じた外国劇の翻訳の性格または限界といふ点で、小林氏は「ヘッダ」を見ながら、「どうしてかう俳優諸君は何となく元氣のない感じなのであらうか。」といふ疑問を持つたことから出発して、「日本の俳優の自由と自信を阻んでゐるのは、イブセンといふ西洋の詩人ではない、翻訳台本といふ癌である。何故切開しないか。」といひ、さういふ「癌」が生じた原因として、「劇の翻訳は、詩の翻訳と同様、一種格別な翻訳の苦心を要求してゐる筈のものだが、今日迄西洋近代劇は、恐らく散文並みの翻訳を通じて紹介されて来た」ことを指摘してゐます。

正宗氏の「漱石とイブセン」は「ヘッダ」の観劇記といふよりむしろ、それを機縁にイブセンの諸作を読みかへした感想ですが、その終りで氏は次のやうに云つてゐます。

「西洋の名作の翻訳を読むと、いつもさう思ふのだが、男女の会話が日本語であるのが邪魔になるやうな気がする。日本語であるため、外国の作中の人物も我々に親しまれていゝ筈であるのに、いろいろな日本語の綾が原作の妙味を排除してゐるやうな気がする。イブセンの戯曲などだと、殊にさう感ぜられる。ヘッダのセリフは殊にさうだ。ヘッダの言葉は、日本の翻訳語よりも、もつときびしく冴えてゐるものではあるまいか。」